

シジミ漁業管理の経営経済的有効性に関する検証

—網走湖シジミ漁業を事例として—

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 水産経営経済学 山崎優輔

1. 背景

シジミ漁業は一般的な内水面漁業とは異なり、生産者にとって収入の柱となる自立的性格を有する漁業である。そのため、今後シジミ漁家の経営をどのように持続させていくかの展望を検討する必要があると考えられる。しかし、シジミ漁業に関する研究は資源変動の要因分析や漁業管理実態の把握に留まっている。漁業管理の効果や管理方式と漁家経営との関係性、シジミの流通構造等といった経営経済的な視点からの踏み込んだ検討がされているものは見当たらない。

2. 目的と事例地域の選定

本論文ではシジミ漁業において生産過程における管理が一定の効果を上げている地域を対象事例とし、漁業管理の有効性と市場条件に応じた産地対応のあり方を検証する。これらより、国内におけるシジミ漁家経営の展望を考察する。

なお事例地域は、国内の主産地の1つであり、北海道において最大の産地である網走湖とした。当地域ではシジミ漁業の先進的な漁業管理により、漁獲量や漁業経営が安定している。また、国内において先進的に厳格な漁獲量制限などを導入した地域である。そのため、シジミ漁業における漁業管理が果たす役割を見るには適した事例であるといえる。

3. 結果

網走湖の管理の実態とその効果をまとめると、管理方式としては厳格な漁獲量制限と産地一体となった生産調整が挙げられ、これらによる管理効果として漁獲量の増加及び安定、価格の時期的変動抑制がみられた。また、現行の管理方式の成立・継続条件としては、網走湖のシジミ資源に対する参入圧力が他産地よりも相対的に弱いことが挙げられる。これにより漁業者の1人あたり漁獲量が相対的に多くなり、厳格な漁業管理に対する合意形成とその持続を可能にした。

一方で、現行の漁業管理は価格上昇効果を有していないことが明らかになった。国内においてシジミは供給だけでなく、需要も減少の一途をたどっており、近年産地では加工シジミの取組みに着手している。加工シジミは生鮮での出荷より利益率が高いと推察され、網走湖においても、加工シジミへの転換がすすめられている。しかし、網走湖における取組は産地にいる指定仲買人独自の取組であり、漁協や生産者はこれにほとんど関与していない。そのため、加工シジミの収益が漁業者に波及されていないのが実態である。加工シジミの本格化により、今日以上に生鮮シジミの増産や差別化は困難な環境になっていくと考えられ、生産者及び漁協も含めた産地一体となる市場対応の再構築が求められている。